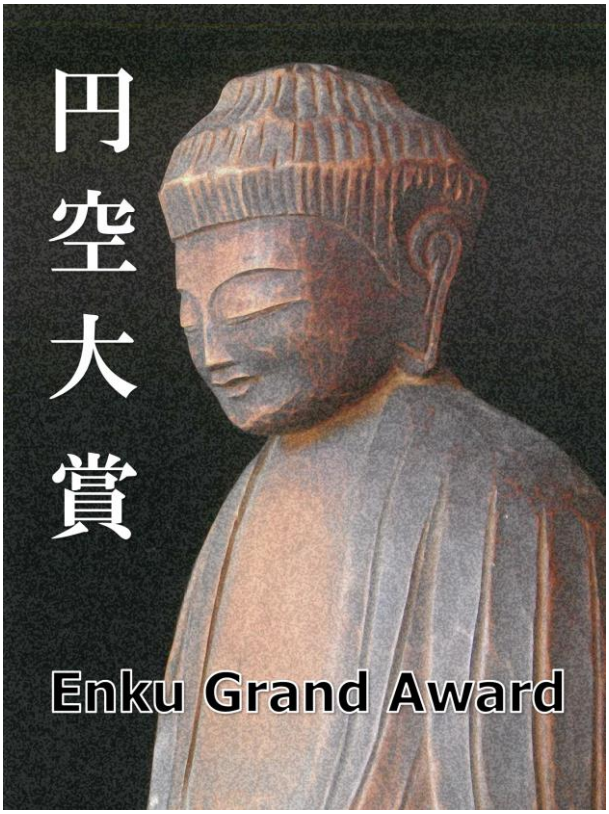
第12回 円空大賞

受賞者の選評および
作家略歴・作品写真



第12回　円空大賞の総評

総評

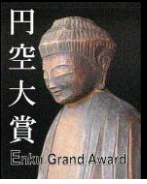
すでにご承知のように、円空仏の魅力というのは、彫像に刻まれた穏やかで慈愛に満ちた微笑みにあるのではないでしょうか。木という素材を巧みに生かしながら簡素化させ、鉈や鑿を自在に駆使して作った仏像の冴え渡った彫跡からは、木の生命力と造形的な美しさとを同時に感じることができます。生涯に１２万体の造仏を修行の目標に掲げた円空ですが、そうして生まれた仏像は多彩な佇まいを浮かべて、一体として同じものがありません。いずれも唯一無二の芸術と評しても差し支えないものです。

さらにもう一つの円空仏の魅力は、宗教的な美しさに結びついていることです。古来より深い信仰心を宿した民衆にとって、遊行僧である円空が施した遊行回国、木食行や断食行、加持祈祷と託宣、勧進などの諸行が、広く信仰の対象となったことは容易に理解できます。明治維新の動乱期に起きた廃仏毀釈のなかでも、円空が手掛けた独創的な仏像を、大切にして今日まで守り続けてきた集落があるのです。こうした人を惹きつける背景には、人々の多くがもつ敬虔な信仰心とあわせて、民衆に寄り添った円空の生き方や柔和な微笑みで見守り続けた円空仏とが重なりあっていることを想像させます。

ところで円空大賞ですが、今回で１２回目を迎えます。委員の多くがリモートによる参加でしたので、意思疎通の難しさもありましたが、多くの候補者の中から選考委員の方々による投票と、丁寧な話し合いを繰り返して、円空大賞をはじめ円空賞の5名の受賞者を決めました。そして受賞者については、それぞれ選考委員に選評をお願いしました。

最後になりますが、円空研究の第一人者・長谷川公茂氏の逝去に触れなければなりません。氏は本事業の屋台骨を支えてこられた一人であったと同時に、第１回からの選考委員でもありました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

第１２回円空大賞選考委員長
美術評論家　酒井　忠康



第12回　円空大賞受賞者一覧

受賞者

円　空　大　賞

アーティスト　Yee I-Lann（イー・イラン）…… P3

円　空　賞

美　術　家　池内　晶子（いけうち・あきこ）…… P5
現代アーティスト　鴻池　朋子（こうのいけ・ともこ）…… P7
建　築　家　坂　茂（ばん・しげる）…… P9
陶　芸　家　吉田　喜彦（よしだ・よしひこ）…… P11

第12回　円空大賞

photo:Al Hanafi Juhar

アーティスト

Yee I-Lann（イー イラン）

マレーシア：コタキナバル出身
1971年生まれ

〈選評〉
安藤　佳香（佛教大学教授）

マレーシアのコタキナバルに生まれたイー・イランは、写真や映像、インスタレーションなどを用いて、東南アジアの歴史を題材としたメッセージ性の強い作品を数多く発表している。近年では、ボルネオ地方の人々や、生活道具であるティカと呼ばれる織物の編み手たちとの共同制作も行う。マレーシア第二の都市でありながら、多くの少数民族が暮らすコタキナバル（そこは今も彼女の重要な制作拠点である）が生んだ実に魅力的な表現者である。
彼女の「近現代美術」の枠に捉われることのない表現の深部には、直接あるいは暗示的に、権力や役割に対する根源的な問いかけが存在している。その意味では、鑑賞者は作品の背後にある様々な歴史的・社会的・文化的コンテクストを読み取るための知が求められることになるだろう。もちろん、可愛さとまがまがしさが同居する色調が目を引く多くのティカを用いたTIKAR/MEJA（2022）のように、その前に立つだけで鑑賞者を強く揺さぶる作品もある。しかし、それぞれのティカに織り込まれたいろいろなかたちのテーブルが、この地ではヨーロッパの植民地になる前には用いられておらず、ティカの上で直に生活が行われていたことを知れば、この作品に込められたメッセージに気づくだろう。
イー・イランの在野性・土着性は、日本列島の各地でその地の人びとと深く結びつき、大地に根ざした神仏像を造り続けた円空に通じ、円空大賞にふさわしい。

〈経歴〉

1971　マレーシアのサバ州に生まれる
1992　南オーストラリア大学学士号（ビジュアル・アーツ）、写真専攻、映画撮影副専攻（オーストラリア）
1993　セントラル・セントマーチンズ美術学校「絵画のためのドローイング」サマースクール修了（イギリス）
1996　「マレーシア現代写真展」（マレーシア国立美術館）
1999　「Through Our Eyes: Contemporary Malaysian Women Artists」（Galeri Petronas／マレーシア）
2003　個展「Horizon」（Valentine Willie Fine Art／マレーシア）
2006　「第1回シンガポール・ビエンナーレ2006」（City Hall／シンガポール）
2009　「第4回福岡アジア美術トリエンナーレ2009」（福岡アジア美術館）
2011　個展「Fluid World」（Contemporary Art Centre of South Australia／オーストラリア）
2014　個展「Yee I-Lann: Picturing Power」（Tyler Rollins Fine Art／アメリカ）
2015　「第16回ジャカルタ・ビエンナーレ2015」（インドネシア）
2016　個展「Yee I Lann: 2005-2016」（Ayala Museum／フィリピン）
2017　MAMコレクション004「未知の物語を想像する」（森美術館／東京）
ASEAN設立50周年記念「サンシャワー東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」（森美術館、国立新美術館／東京、福岡アジア美術館）
2019　個展「ZIGAZIG ah!」（Silverlens／フィリピン）
2020　「2020アジア・プロジェクト」（国立現代美術館／韓国）
2021　個展「Yee I-Lann & Collaborators: Borneo Heart」（Sabah International Convention Center／マレーシア）
「第10回アジア・パシフィック・トリエンナーレ」（QAGOMA／オーストラリア）
2022　個展「At the Roof of the Mouth」（Silverlens／アメリカ）
国際芸術祭「あいち2022」（愛知芸術文化センター他）
2023　個展「Borneo Heart in Kuala Lumpur」（マレーシア）
「ワールド・クラスルーム 現代アートの国語・算数・理科・社会」（森美術館／東京）
2024　「Unravel: The Power and Politics of Textiles in Art」（Barbican Centre／イギリス）
個展「Art Wall」（University of California, Berkeley Art Museum & Pacific Film Archive／アメリカ）

第12回　円空大賞

≪TIKAR/MEJA 2020≫
Bajau Sama Dilaut pandanus weave, commercial　chemical dye
Kak Sanah, Kak Kinnohung, Kak Budi, Kak Leleng, Kak Horma,　Makcik Billung, Kak Roziah, Adik Dela, Adik Erna,Abang Boby, Adik Alini, Adik Aisha, Adik Darwisa,Adik Marsha, Adik Dayang, Adik Tasya, Adik Shima,　Adik Umairah, Abang Tularan.,
Image courtesy of the Artist and Silverlens

≪THE TUKAD KAD SEQUENCE #06 2023≫
208.0h x 314.0w cm split bamboo pus weave with kayu obol black natural dye, matt sealant
with weaving by weaving by Julitah Kulinting, S Narty Raitom, Julia Ginasius, Zaitun Raitom,
Image courtesy of Alvin Lau

≪Tikar Reben (video)with weaving by Kak Roziah,≫
Performed by Kak Roziah, Kak Sanah, Kak Kinnuhong, Kak Budi, Adik Darwisa,,Kak Anjung, Adik Erna, Adik Norsaida, Kak Kuluk,,Kak Goltiam, Kak Kenindi, Adik Koddil and Adik Anneh.
Cinematography by Andy Chia,Chee Shiong (Deebee Studio)
Song by Kak Budi(2021)
Image courtesy of the Artist and Silverlens

第12回　円空賞

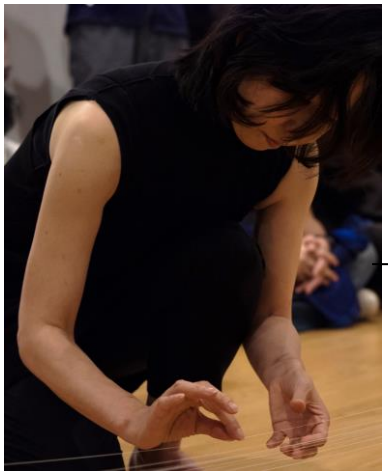


photo:Ken Kato courtesy of Yokohama Civic Art Gallery

〈選評〉

長屋　光枝

（国立新美術館学芸課長）

空間に浮かぶ緊張感を孕んだ繊細な構造体は、何の変哲もない絹糸でできている。池内は、糸を編むのではなく、結んでは切るという気が遠くなるような手間をかけてこれを出現させる。その空間に立ち入った私たちは、糸の構造物の背後にある身体的な行為と時間に圧倒されるだけでなく、糸のどの一本が切れても成り立たないがゆえの緊迫感を覚える。そして、均衡と緊張のはざまで空間が打ち震えているのにも気づかされる。東京藝術大学在学中に池内は、木の枝を立たせるために初めて糸を用い、やがて、糸を結ぶと方向や張力が変わることに気づかされた。この経験に端を発し、その後も一貫して糸を用いてきた池内は、木綿やポリエステルの糸も試したが、次第に絹に集中していった。絹は自然の素材だが、紀元前からある養蚕という人為を経て生産される。自然と文明の相克、素材と身体、あるいは造形物を介した身体と空間との均衡や緊張は、円空と池内の営みに通底する重要な要素であり、着眼点である。

美術家

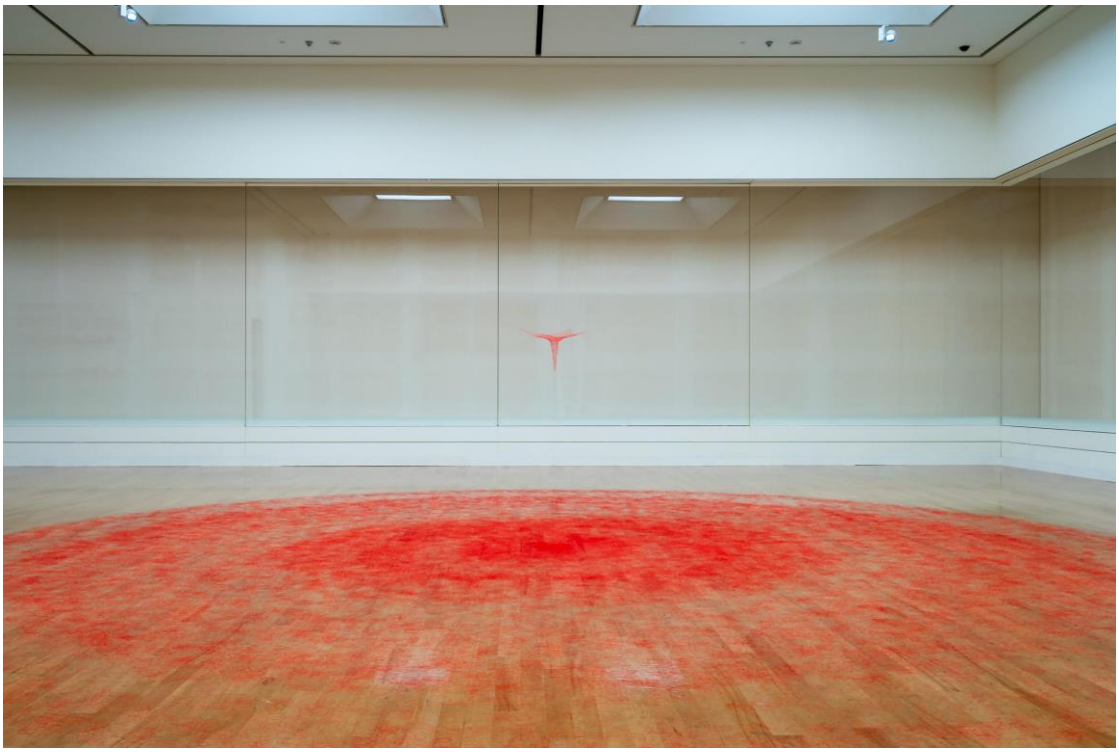
池内（いけうち）　晶子（あきこ）　IKEUCHI Akiko

日本：東京都出身
1967年生まれ

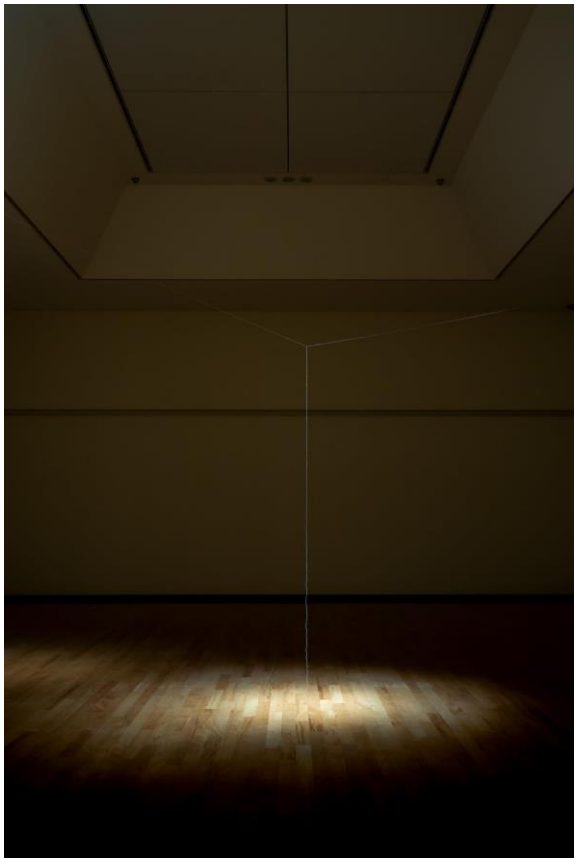
〈経歴〉

1967　東京都に生まれる
1991　東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業、0氏記念賞受賞（大橋賞）
個展「池内晶子展」（INAXギャラリー2／東京）
1993　東京藝術大学大学院美術研究科絵画（壁画）専攻修士課程修了
個展「池内晶子展」（横浜ガレリア ベリーニの丘ギャラリー／神奈川）
1994　個展「池内晶子展」（以降11回、個展を継続的に行っている。gallery21yo-j／東京）
1996　「第6回富山国際現代美術展 TOYAMA NOW ‘96」（富山県美術館）
1998　東京藝術大学大学院美術研究科油画専攻博士課程満期退学（単位取得）
文化庁派遣芸術家在外研修員（ニューヨーク／アメリカ）（～’00）
2000　「Asian American Arts Center The 10th Annual: 2 FAR 2 CLOSE」（アメリカ）、個展「池内晶子展」（Keumsan Gallery／韓国）
2001　「日独交流展 青木野枝・池内晶子展」（Gallery ARTicle／ドイツ）
2007　「第22回 現代美術『こうふ』展」（甲府市藤村記念館／山梨）
「2007 Heyri Asia Project II」（Chasm／韓国）
2011　「MOTアニュアル2011 Nearest Faraway｜世界の深さのはかり方」（東京都現代美術館）
2012　「Guimaraes noc noc 2012」（Plataforma das Artes／ポルトガル）
2013　「秘密の湖」（ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション／東京）
2014　個展「池内晶子展」（E&Cギャラリー／福井）
2015　「Reflection:返礼―榎倉康二へ」（gallery21yo-j、スペース23℃／東京）
2016　個展「AKIKO IKEUCHI SILK THREAD INSTALLATIONS」（THE JAPAN FOUNDATION GALLERY／オーストラリア）
「新・今日の作家展2016創造の場所―もの派から現代へ」（横浜市民ギャラリー／神奈川）
2016　「19th DOMANI・明日展」（国立新美術館／東京）（～’17）
2018　「水と土の芸術祭2018」（砂丘館／新潟）
2019　個展「或る日｜Oneday」（tadpole-lab／東京）
2021　個展「池内晶子 あるいは地のちからをあつめて」（府中市美術館／東京）（～’22）
2023　「MESSHU」（Officinet／デンマーク）
Honorable award 2023, The Danish Arts Foundation, for the exhibition Messhu in Copenhagen, Denmark.

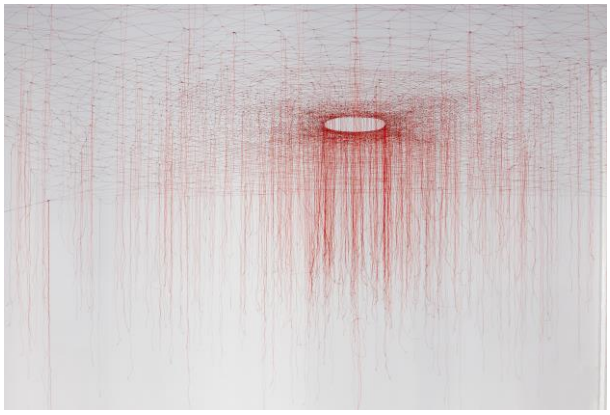
第12回　円空賞



《Knotted Thread-red-Φ1.4cm-Φ720cm》 2021　絹糸
個展「池内晶子　あるいは、地のちからをあつめて」（府中市美術館／東京）　photo:Tomoki Imai

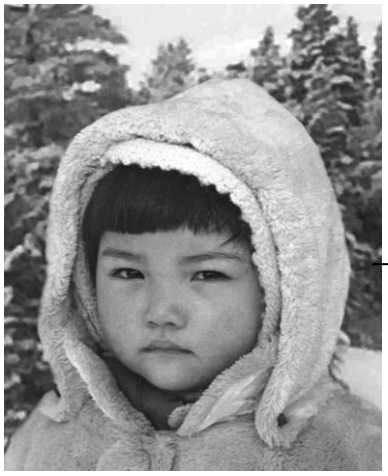


《Knotted Thread-h220cm(north-south)》 2021 絹糸
個展「池内晶子　あるいは、地のちからをあつめて」
（府中市美術館／東京）　photo: Tomoki Imai



《Knotted Thread-red-h140cm-Φ12.6cm》 2022-2023 絹糸
「MESSHU」（Officinet／デンマーク）photo:Torben Petersen

第12回　円空賞



〈選評〉

長屋　光枝

（国立新美術館学芸課長）

人は世界をいかに経験し、ものを作り出すのか。鴻池は、生きることと創造をめぐる根源的な問いに基づき、絵本、絵画、彫刻、映像、インスタレーション、手芸、パフォーマンスなど、多様に活動してきた。使う素材も、動物の皮や毛皮、布、光を放つガラスなど、私たちの視覚だけでなく、触覚や記憶なども刺激する。また、場に結びついた歴史や記憶への着眼、フィールドワークに基づいた制作、市井の人々との親密な協働などは、美術をめぐる硬直した制度に揺さぶりをかけ、円空との親和性も高い。全国を旅して庶民のために仏像を彫った円空との関連では、鴻池が2014年から続けている《物語るテーブルランナー》が示唆に富む。旅先で鴻池は、個人の物語を聞き取って下絵を描き、語り手たちがそれをランチョンマットに仕立てる。愉快な話や悲しい話、ありふれた日常から摩訶不思議な話まで、さまざまな内容の個人の話は、テーブルランナーとしてつなげられ、土着的な集合的記憶を思わせる大きな力強い物語となる。

現代アーティスト

鴻池（こうのいけ）　朋子（ともこ）　KONOIKE Tomoko

日本：秋田県出身
1960年生まれ

〈経歴〉

絵画、彫刻、手芸、歌、映像、絵本など様々なメディア、人類学、考古学、おとぎ話との学際的な交換、また旅や猟を通じた場との出会いによって、芸術の根源的な問い直しを続けている。

1960　秋田県生まれ
2006　「THE SCARECROW」（Averoff Gallery of Modern Art／ギリシャ）
　　「PHOTOESPANA-NATURALEZA: EXPERIENCIA-」（San Roman Church／スペイン）
2007　「Linien」（Nassauischer Kunstverein Wiesbaden／ドイツ）
2008　「広州トリエンナーレ」（中国）
2009　個展「インタートラベラー　神話と遊ぶ人」（東京オペラシティアートギャラリー）
2010　「釜山ビエンナーレ」（韓国）
2011　個展「獣の皮を被り 草の編み物」（Gallery Hyundai／韓国）
2013　個展「Tomoko Konoike」（Wendy Norris Gallery／アメリカ）
2015　個展「根源的暴力」（神奈川県民ホール、群馬県立近代美術館、新潟県立万代島美術館）（～'17）
2016　芸術選奨文部科学大臣賞受賞、「Nous」（金沢21世紀美術館／石川）
　　「Temporal Turn」（Spencer Museumカンザス大学自然史博物館／アメリカ）
2017　「Japan-Spirits of Nature」（ノルデスカ美術館／スウェーデン）
2018　個展「Fur Story」（Leeds Arts University／イギリス）
　　個展「Hunter Gatherer」（秋田県立近代美術館）
　　「Echoes From The Past」（シンカ美術館／フィンランド）
2019　「瀬戸内国際芸術祭2019」（大島／香川）
2020　毎日美術賞受賞、個展「ちゅうがえり」（アーティゾン美術館／東京）、「古典×現代2020」（国立新美術館／東京）、「The Travel Dialogue Form」（グラスゴーインターナショナル／イギリス）
2021　「VIDEOFORMES」（クレルモン・フェラン映像祭／フランス）
　　「Story-makers」（シドニー日本文化センター／オーストラリア）
2022　個展「みる誕生」（高松市美術館／香川、静岡県立美術館）
　　「瀬戸内国際芸術祭2022」（大島／香川）
2023　紫綬褒章受賞、「六本木アートナイト」（国立新美術館／東京、東京ミッドタウン）

＜パブリックアート＞
長崎鼻リゾートキャンプ／大分、ワテラス／東京、ロッテワールドモール／韓国、港南こども中高生プラザ／東京、伊東豊雄建築集合住宅／シンガポール、ミューザ川崎／神奈川

＜著書＞
絵本『みみお』（青幻舎）、絵本『焚書World of Wonder』、『根源的暴力』、『どうぶつのことば』、『ハンターギャザラー』（共に羽鳥書店）

第12回　円空賞

≪皮緞帳≫
2015　幅24m 高さ4m　牛革、水性クレヨン、アクリル塗料
個展「根源的暴力」（神奈川県民ホールギャラリー）展示風景　高橋コレクション所蔵
撮影：中道 淳Nacasa&Partners　©TOMOKO KONOIKE

≪大島 皮トンビ≫
2019　幅12m　高さ4m　牛革、水性クレヨン、アクリル塗料
「瀬戸内国際芸術祭2019」（大島／香川）展示風景
撮影：中道 淳Nacasa&Partners　©TOMOKO KONOIKE

≪物語るテーブルランナー≫
2014～(現在)　一枚のサイズ：300×450mm　布地、刺繍糸、フェルト、ミクストメディア
（阿仁ふるさと文化センター／秋田、金沢21世紀美術館／石川、グラスゴー芸術大学／イギリス、秋田県立近代美術館、シドニー文化センター／オーストラリア、ギャラリー ヤルナッティ ／フィンランド、タスマニア大学／オーストラリア、国立新美術館／東京、アーティゾン美術館／東京、群馬県立近代美術館、高松市美術館／香川、静岡県立美術館、新潟県立万代島美術館）他多数
撮影：中道 淳Nacasa&Partners　©TOMOKO KONOIKE

第12回　円空賞

建築家

坂（ばん）　茂（しげる）　BAN Shigeru

日本：東京都出身
1957年生まれ

〈選評〉
高橋　秀治（豊田市美術館長）

坂茂は「建築家は社会の役に立っているのか？」を自らに課した命題として活動してきた。美術館などのモニュメンタルな大規模建築の設計デザインも手掛け、それを建築家の仕事として否定しているわけではないが、一方で、1994年ルワンダ内戦の難民キャンプへの支援活動に飛び込んで以来、翌年の阪神・淡路大震災での被災者のための活動を端緒として、難民や災害避難者のための活動も建築家として継続的に行っている。
展覧会のディスプレイに使用された紙管の再利用からスタートして、住民に寄り添いながら仮設住宅や避難所の間仕切りなどを制作してきた。それらは安価で、施工しやすく、さらに再利用もしやすいサステナブルな建築物や構築物である。自ら日本国内はもとより、世界各地へ赴き、行政との交渉や現地のニーズを把握したうえで、その場に即した提案をし、数々を実現してきた。しかもそれらは美しさも兼ね備えた作品ともいえる。
建築という造形の分野のなかで、地域の民衆と交流しヒューマンなその活動は円空の精神に通じるものである。

〈経歴〉

1957	東京都に生まれる
1977	南カリフォルニア建築大学（SCI-Arc）在学（～'80年）
1982	磯崎新アトリエ勤務（～'83年）
1984	クーパー・ユニオン建築学部（NY）卒業（建築学士号）
1985	株式会社坂茂建築設計設立
1995	NGO ボランタリー・アーキテクツ・ネットワーク（VAN）設立 国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）コンサルタント（～'99）
2001	慶應義塾大学環境情報学部教授（～'08）
2004	フランス建築アカデミー ゴールドメダル 受賞
2005	「アーノルド・W ・ブルンナー記念賞」建築部門世界建築賞受賞（アメリカ）
2006	王立カナダ建築家協会 名誉会員
2008	フランス国家功労勲章オフィシエ受章
2009	日本建築学会賞作品賞受賞
2010	ハーバード大学 GSD 客員教授、コーネル大学客員教授 フランス芸術文化勲章オフィシエ受章
2011	オーギュスト・ペレ賞受賞 京都造形芸術大学芸術学部環境デザイン学科教授（～'23）
2012	芸術選奨文部科学大臣賞受賞
2014	プリツカー建築賞受賞
2015	慶應義塾大学特別招聘教授（～'19）、環境情報学部教授（'19～'23）
2016	日本建築大賞受賞
2017	紫綬褒章受章、マザー・テレサ社会正義賞を日本人初受賞
2022	アストゥリアス皇太子賞受賞
2023	芝浦工業大学特別招聘教授就任（～現在）

＜代表作＞

2000	ハノーバー国際博覧会日本館（ドイツ）
2010	ポンピドー・センター メス（フランス）
2013	紙のカテドラル（クライストチャーチ大聖堂）（ニュージーランド）
2015	大分県立美術館
2017	静岡県富士山世界遺産センター ラ・セーヌ・ミュジカル（フランス）
2019	スウォッチ・オメガ本社（スイス）、台南市美術館（台湾）
2023	下瀬美術館（広島）

第12回　円空賞

≪ハノーバー国際博覧会　日本館≫　2000　ドイツ　Photo: Hiroyuki Hirai

≪ポンピドー・センター　メス≫　2010　フランス
Photo: Didier Boy de la Tour

2024年1月1日 能登半島地震の避難所用・紙の間仕切りシステム（PPS）　金沢市額谷ふれあい体育館
Photo:坂茂建築設計

第12回　円空賞

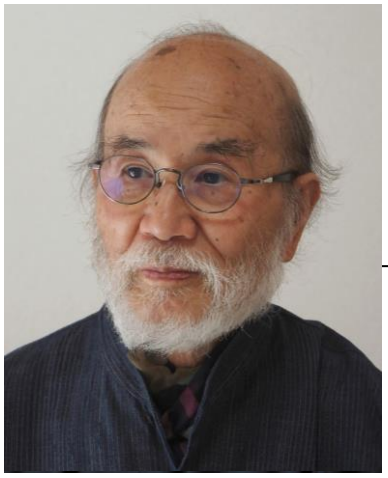


photo:小寺克彦

〈選評〉

ヤン・ファン・アルフェン
（アジア芸術専門家）

かつての美濃国の中に位置する可児市の山中に住み、やきものの世界に囲まれている。彼は自分を売り込むことには興味がない。世俗から離れ、ひたすら制作に没頭する仙人のようだ。また、人間国宝となった荒川豊蔵（1894-1985）の下に1956年から13年間、弟子入りしていた。

岐阜に生まれた古いやきものの伝統に深く根ざした経験と生き方で、吉田氏は優れた陶芸家となった。日本独特の「茶碗の芸術」を捉え直して、彼は最高水準を示している。彼の茶碗の多くは、丸みを帯びたフォルムと静かな品格を備え、完璧な釉薬の繊細な色彩と相まって、美しさを際立たせ、その素朴さと誠実さで見る者を魅了する。

ほとんどの茶碗の高台にある小さな無釉の丸い部分は、釉薬に浸す時に茶碗をもった「ゆび跡」である。目利きの人たちは、薪窯の炎から作品を取り出し、創り出される様々な色や釉薬の変化のなかに、吉田氏の作品独特の作風を認めるだろう。

陶芸家

吉田（よしだ）　喜彦（よしひこ）　YOSHIDA Yoshihiko

日本：栃木県出身
1936年生まれ

〈経歴〉

1936　栃木県宇都宮市に生まれる
1956　荒川豊蔵のもとで作陶をはじめる
1969　築窯、初窯を焚く
1981　個展（ギャラリー華／東京）以降9回、作品集9冊
1988　「現代日本陶芸展」（ポートランド美術館／アメリカ）
　　粉引大壺収蔵（ビクトリア＆アルバート美術館／イギリス）
1989　信楽しのぎ手大板収蔵（東京国立博物館）
　　信楽しのぎ手筒他３点収蔵（ビクトリア＆アルバート美術館／イギリス）
1990　粉引大壺収蔵（ダラス美術館／アメリカ）
1992　NHK主催「日本の陶芸“今”百選展」
1994　「躍動する栃木の陶芸シリーズ第７弾　吉田喜彦展」（東武宇都宮百貨店／栃木）
1995　「JAPANESE STUDIO CRAFTS 」（ビクトリア＆アルバート美術館／イギリス）
1997　三弁花形鉢収蔵（大阪市立東洋陶磁美術館）
2000　作品収蔵（キャンベラナショナルギャラリー ／オーストラリア）、 作品収蔵（コカ・コーラ美術館／アメリカ）
2003　黒陶多面体収蔵（栃木県立美術館）
2006　黒陶多面体収蔵（東濃信用金庫・美濃陶芸作品永年保存事業）
2007　ボードアンと二人展（GALERIE DOYEN／フランス）
2008　講演・ワークショップ（サンフランシスコ アジア美術館／アメリカ）
　　講演・ワークショップ（ポートランド美術館ほか／アメリカ）
2013　茶盌２点収蔵（茨城県陶芸美術館）
2014　作品２点収蔵（ポートランド美術館／アメリカ）
　　「陶芸家　吉田喜彦展」（世田谷美術館／東京）
2015　作品収蔵12点（国立ギメ東洋美術館／フランス）
　　「吉田喜彦とうつくしいものたち」（岐阜県現代陶芸美術館）
2016　「益子と美濃を結ぶ陶芸家　吉田喜彦展」（益子陶芸美術館／栃木）
2017　作品収蔵（大分県立美術館）
　　作品収蔵（安田侃彫刻美術館　アルテピアッツァ美唄／北海道）
2020　作品収蔵（岐阜県美術館）

＜作品集＞
「吉田喜彦」（京都書院）
「躍動する栃木の陶芸　吉田喜彦」（下野新聞社）

第12回　円空賞

≪志野梅絵茶盌≫　1997　径13.2cm×高10.2cm陶器　岐阜県美術館蔵

≪白化粧しのぎ手　鉢≫
1994　径28.4cm×径26.0cm×18.5㎝　陶器　個人蔵

≪黒陶多面体≫
1991　径28.5cm×高32.0cm　陶器　個人蔵